社會思想パンフレット第七輯

階級獨裁の現實



中央報德會

凡例

一、著者ラファエル・アブラモヴィッチRaphael Abramowitschは、全ユダヤ人勞働者同盟及びメニセヴィキ黨の中央委員會の委員で目下ドイツに亡命中である。本冊子はアブラモヴィッチがロシヤの現狀に就て、一九三一年三月十四日伯林の自由社會主義大學に於て講述した『ボリセヴィキ獨裁の轉向』なる講演の譯文である。

一、讀者の參考迄に卷末に社會科學上の用語の中若干に就き簡單なる說明を附して置いた。

昭和七年四月

法學士　向井新

社會に於ては、進歩と秩序とが共存しなければならない。進歩のために秩序が犠牲に供せられるとき、進歩そのものも阻止せられ、秩序のために進歩が犧牲に供せられるとき、秩序そのものも破壞せられる。進歩に依つて秩序は眞實に秩序であり、秩序に依つて進歩は眞實に進歩であり得る。

吾々が此の觀點に立つとき、其の取るべき針路は自ら明瞭である。唯、現時の思想界に低迷する濃霧は、動もすれば吾々をして、此の明瞭なる針路を失はしめやうとする。

玆に本叢書を刊行して、社會思想に關する學說の紹介、またそれに就いての批判を試みることは、此の濃霧を消散せしめ、輝ける太陽の下、風波穩かなる裡に、社會を航海せしめやうとする吾々の微衷である。

中央報德會

階級獨裁の現實

一、主觀的な目的設定と社會運動の實際的業績

社會的變革とか又は政治的變革と謂ふが如き歷史的な、社會的な大事件を振返つて研究し或は觀察する場合に於て、この事件に於て活動してゐる政黨及び活動してゐる人々の企圖するところ及び目的とするところと、客觀的に見た彼等の業績及び實際的な職能とを混同するならば、それは重大な過失を犯すものである。目的とするところと現實となつたところのものとの間に屢〻啀み合ふところの矛盾を發見したのは、マルクス主義的歷史研究の偉大なる功績である。例へば諸君が宗教改革(一)の時代、宗教戰爭(二)の時代を顧みる場合に於て、宗教改革者や再洗禮論者等(三)の主觀的な目的、原始キリスト教へ復歸せむとする彼等

目次

今日尙ほ吾々の眼前に展開し、今日尙ほ靜止するに至つてゐないところのロシヤ大革命を觀察するに際しても亦、吾々は活躍してゐる政黨が主觀的に定めた目的及びその追求、換言すればロシヤ的獨裁と實際の歷史的業績及び將來期待せらるべき結末とを同一視するが如き過失を犯してはならない。國家の宣傳機關全體を支配してゐるが故に優勢であるところの、ボリセヴィキ側の公の歷史記述から影響を受けて、人はロシヤ革命の樣々な段階をプロレタリア的段階とブルジョア的段階とに區分することに慣されてゐる。人が謂ふところによれば、一九一七年三月のケレンスキ革命はブルジョア的＝民主主義的革命であつた。これは十一月に至りプロレタリア的革命によつて解消せしめられたと。多數の人々には、殊に哀しい哉多數の同志には、それ以後に起つてゐる事柄が、巨大な困難と妨害との克服の下に行はれてゐるところの、プロレタリア的革命の前進的發展であるかのやうに見えてゐる。併しながら事態はそのやうに簡單ではない。

二、ロシヤ革命（一九〇五年乃至一九一七年）の性質

の主觀的願望と、近代的資本主義の發展の爲にイデオロギー(四)的に且精神的に道を拓いたところの、この重大な精神的變革の實際的歷史的な結果とを混同するならば、諸君は重大な錯誤に陷るのである。諸君がフランス大革命を顧みる場合に於て、ジュアン・ジャック・ルソー流の理想とフランス革命の實際的結末とを平等視せむと欲するならば、諸君は間違つた道に踏み込むであらう。最後に諸君がダントンやロベスピールやマラーの如き人々の情熱的長白とナポレオン帝國の現實とを同一視するならば、フランス革命は歷史的に見て失敗であつたと諸君は信ぜざるを得ないであらう、然るに諸君がその眞實の歷史的作用を觀察した場合に於ては、フランス革命が實際に於て巨大な歷史的功績であり、偉大な業績であつたことを諸君は知るであらう。この業績を唯だ活動してゐる人物及び活動してゐる政黨が主觀的に定めた目的やその追求によつて測定してはならない。若し諸君が一八四八年の革命を顧みる場合に於て、諸君は恐らくマルクスの骨を刺すやうな皮肉を思ひ出すであらう、それは次のやうに書かれてある――旗の上には『自由、平等、博愛』と現はれてゐたが、實際に於てはそれは、砲兵隊、騎兵隊、歩兵隊のことであると。

と、マルクス主義者は無條件に確信する。即ち、ロシャにとつて一の必然となつたところの、政治的竝社會經濟的秩序に關する民主主義的變革は、それ自體に於て資本主義の妨害やブルジョアジーの支配の妨害を何等意味するのではなく、寧ろ反對に資本主義の急速な、ヨーロッパ的な、非アジャ的な發展竝階級としてのブルジョアジーの實際的支配の爲に始めて地盤を正當に開拓するのである』。これを書いた同一のマルクス主義者は次の如く附言してゐる『ロシャに於ては最大限綱領(七)を實現することが可能であり……社會主義が理想を實現する爲に權力が利用せられ得ると主張するが如き不合理な、半無政府主義的な考へ方に對し、人は斷乎として絶縁しなければならない』と。

前掲の兩引用文の出處はマルクス主義的研究者たるレーニンである。彼は私が引用した言葉を一九〇五年に彼の著書『社會民主黨の二つの戰術』中に書いた。從つてボリセヴィキのこの指導者がその當時及び一九一五年迄は全社會民主黨と共に、ロシャに於ては謂ふ迄もなく革命が起るに違ひない、併しこの革命は一のブルジョア的=民主主義的なものであらねばならぬし、且それは社會主義の實現を目標と定めるものではないであらうと謂ふ

ロシヤに於ては革命が起らざるを得ないと謂ふことは、第十九世紀の末期に於て既にロシヤ事情の凡ゆる觀察者によつて確認せられてゐた。ロシヤに於てはあの農民革命、あのブルジョア的＝民主主義的變革が既に以前から熟してゐた、而してこれなくしてはロシヤに於ける近代的な、資本主義的工業の發展は不可能であつた。一八六一年にロシヤに於ては農奴の叛亂があつた、併し農民はその身分上の自由を獲得したと雖も、而も彼等の社會的且經濟的自由、及び近代的資本主義的進化の爲に缺くことが出來ないところのロシヤに於ける農業狀態の變更が達成せられなかつた。

ロシヤ帝政が必要なる政治的改革を實行するに無能力であるが爲に革命に到達せざるを得ないと謂ふことは、ロシヤに於ける吾々總てが、メニセヴィキもボリセヴィキも共に知つてゐた。而してこの革命は歷史的意味に於て資本主義の利益によつて擔はれ、且半封建的農業狀態からの農民階級大衆の解放を目的とするものである。この變革の結末がブルジョア的＝民主主義的國家であるであらうと謂ふ點は、社會民主主義的、マルクス主義的陣營に於ては何等論爭の問題ではなかつた。『ロシヤ革命がブルジョア的革命であるであらう

年及び一八七〇年代のロシヤに於て發生したのである。

この意見（ナロドニキ）(八)は、資本主義を回避して即時に社會主義を開始することを、單に希望する價値ありと認めるのみならず、此處に發生すべき民衆革命又は農民革命に際して、之を全然可能なことだと認めた。その希望並に打算は、人が特に『共產主義的』農村（『ミル』）(九)及び農村協同體（『アルテル』）(一〇)に於て認めたところのロシヤ村落、及びナロドニキの意見に依れば、ロシヤ農民を『生れ付きの社會主義者』及び『本能的革命家』に成したところのロシヤ村落に於ける原始共產主義の殘滓の上に基礎を置いてゐた。

歷史的發展段階に關する飛躍のこの理念は、既に一八六一年の有名なる『宣言』即ち革命家ミハイロフの『青年に與ふ』（實際は著名な記者セルグノフによつて書かれた）に於て述べられた。其處には次の如く書かれてゐる：：『ロシヤは無條件的にヨーロッパと同一な發展段階を經過するであらうと謂ふことは眞實でない。吾々は勿論その様な經過を辿り得るであらう、併しながらそれは單に吾々自身が進んでヨーロッパの政治的及び社會的制度文物の罠に陷る場合に於てのみである。併しながら吾々はそれを避けて、帝政から直接に

立場に立つてゐたことを人は認めるのである。

唯だ＝政治的な、ブルジョア的＝民主主義的な變革と異つて、社會的最大限主義換言すれば『社會的革命』の理念は、ロシヤに於ては工業的プロレタリアト竝近代的な資本主義的工業の發生以前に世に現はれた。前資本主義的な帝政的なロシヤに於て一種の『階級』を表示し、且その思想及び感情の全體に於て社會的竝政治的に束縛せられてゐる農民階級と最も密接に結合をしてゐるところのロシヤ知識階級の發展中の特定な時期に、この『社會的革命の理念』は起源を有するのである。彼等にとつて農民階級と同一であつたところの『人民』の利益に於て、同樣に亦全く固有の『階級利益』に於て、ロシヤの『平民的』知識階級の廣汎な層が、農民の政治的自由と社會的解放の爲に、貴族と貴族的大地主との特權に對して鬪爭した。イデオロギー的には精々バクーニン及びトカチョフの名によつて特徴を表はしてゐたところの、知識階級の急進的翼はこの目標を、『西歐的な』ドイツ及びフランスから引受けた社會主義の理念に結び付けむと努力した。當時ロシヤ知識階級にとつて眞の宗教に迄なつたところの『ロシヤの』社會主義即ち『國民的』社會主義が一八六〇

を永續的なものたらしめることが可能となるであらう』(同書第六頁)。從つて社會主義的理想が可能となる以前に、凡ゆる國は資本主義的工業の發展段階を通過しなければならないと。世界經濟にとつて決定的に高度の發展をした國々に於て社會主義が勝利を得た場合に於ては、後進の諸國(例へば植民地等々)の場合に在つては、この歷史的道程が後進國の爲に唯だ短縮せられ得るに過ぎない――と、他の箇所でエンゲルスは附言してゐる。

而して空想的意見とマルクス主義的意見との間のこの相違に、その後ロシヤ社會主義の二つの主要意見間の歷史的大鬪爭がその根底を有するに至つたのである。これ等の意見の一つはナロドニキの意見であつて、農民社會主義、原始共產主義の立場竝にヨーロッパと異つて全然特殊な社會主義を建設するの可能性を信ずる立場の上に正しく立つてゐた。他の一の意見はマルクス主義者の意見であつて、その先頭にはプレハノーフ、アクセルロト、ヴェラ・サッスリッチ、『若手』では――ポットレソフ、レーニン、マルトフ等が立つてゐた、この意見は空想主義者と反對に、人はロシヤに於て發展の個々の段階をヨーロッパの前例と丁度同樣に經過することが出來る、人は寧ろロシヤに來りつゝある革命がブルジョ

社會主義へ上陸することが出來る』と。

同一の思想行程を特別に明瞭な形態に於て、バクーニンの門弟ペー・トカチョフは彼の『フリードリッヒ・エンゲルス氏宛の公開狀』(チューリッヒ一八七四年)に於て發展せしめた、その公開狀に於て彼は、ロシヤに於ては謂ふ迄もなく『何等の都市プロレタリアトも存在してゐないが、併しそれかと謂つて……何等のブルジョアジーも』存在してゐないことから、ロシヤの社會的革命の爲に生ずる長所を特に指摘してゐる。

トカチョフ宛の回答『ロシヤの社會的事情』(チューリッヒの『民衆國家』誌所載、一八七五年ライプチッヒに於て冊子として刊行せられた)は、マルクス主義の原則に關する優秀な說明である。エンゲルスは此處で次の如く述べてゐる、總ての階級差別を根絕するであらうと謂はるゝが如き社會主義的革命には單はプロレタリアトのみならず、ブルジョアジーが必要である、何等のブルジョアジーも存在してゐないことは、ロシヤにとつて決して利益ではない『社會的生產諸力の、吾々の時代關係にとつて甚だ高度の一定の發展程度に達して、始めて生產を高めて、以て階級差別の廢除が眞の發達たることを得しめ、それ

は一九一七年十一月彼の手中に落ちて來た權力を最大の無遠慮を以て、彼が一九一七年の有名な『四月テーゼ』に於て始めて公表したところのあの『社會主義的革命』を敢行する爲に利用した。

三、一九一七年の三月革命とその失敗

一九一七年には久しく待望せられてゐた革命がロシヤに來た。それは來らざるべからざりしが如く、農民革命として來た。併しこのことは、農民が村落に於て革命を行つたが如く解すべきではない。戰爭は總體で約一千萬の農民子弟を村落から引上げて敎育し、且武裝せしめて都市に持つて來た。斯くしてその時までは無數の村落に散在せしめられてゐた農民階級は、今や一部分が而もその最も能動的な、最も氣銳な、最も活動的な部分が組織せられ、集合せられ且政治的に敎育せられたから、此處に階級の權力關係の巨大なる推移が自然と起つたのである。ロシヤ農民階級のこの前進せしめられた部分が帝政及び革命の運命を決定した。ロシヤに於ける革命的政黨卽ちナロドニキの後身――『社會革命黨』も

ア的＝民主主義的革命であることに滿足しなければならない、斯くして資本主義的な且工業的な發展の段階が生じ、此處に至つて始めて、資本主義がその主要居所を占めてゐるところの、ヨーロッパの最も發展した國々に於ける社會事情が非常に進展して、其處に有望な社會主義的變革が可能となる場合に於ては、後進諸國も亦組織せられ、且勝利を得てゐるプロレタリアトの援助を待つて樣々な段階を短縮し、且この道程を辿つて同樣に社會主義へ達することに近づくのであると謂ふ見解を代表してゐた。

これは一九一七年に至る迄社會民主黨のボリセヴィキ翼の見地でもあつたことを、吾々は既に述べたのである。一九一六年以來始めてレーニンは、直接的な社會主義的變革を論ずることがロシヤに於て果して可能でないかどうかを熟考し始めた。この熟慮は世界戰爭がプロレタリアトの世界革命を伴ふことなくして終結することが出來ないと謂ふ、彼にとつては確固たる事實に基いてゐた。然るに先進の資本主義的諸國に於けるプロレタリアトの權力獲得に導くべきであつたところのこの世界革命は起らなかつた。併しこの事實はレーニンをロシヤ革命に關する以前のマルクス主義的見解に歸らしめなかつた。反對に、彼

勢に對し完全な理解を有してゐた。廣汎な範圍に於て農民の利益と合致したところの都市勞働者階級の特別な利益を、このブルジョア的＝民主主義的農民革命に於て保護し、且新しい民主主義的農民共和國に於て社會主義的鬪爭の爲に可及的に有利な地位をプロレタリアトに保障せむが爲に、社會民主黨は盡力した。

ロシヤの最初の革命政府が革命のこの綱領を履行し得なかつたと謂ふことに導いたところの、ロシヤに於ける發展の特殊事情に關しては、此處で詳細に述ぶることは出來ない。革命に關して最重要事は農民に對する土地の分配であつた。有力な革命的諸黨、特に最も强力な政黨、卽ち無論一の農民黨であつたところの社會革命黨は、急進的な農業改革を斷行すべく完全な覺悟を有してゐた。土地の分配は、一千萬の若い農民子弟が戰線に立つてゐる限り、その實施は不可能であり、戰爭が繼續する限り、彼等は故鄕に歸さることが出來なかつた。農業改革が宣言せらるる瞬間に一千萬の農民子弟が最早戰線に止まることの出來ないのはわかり切つてゐる。從つて戰爭が終結するまでは、凡ゆることが延期せられざるを得なかつたのである。而してペテルスブルグ勞働者ソヴィエトの最初の宣言中に述

兩翼（メニセヴィキ及びボリセヴィキ）に分れてゐる社會民主黨も亦、一九一七年三月迄は組織的には重要な團體ではなかつた。革命は一千萬の農民子弟によつて行はれた。政黨はこの巨大なる運動に於ける酵母に過ぎなかつた。

さて凡ゆる革命は併ながら發展に關するそれ自身の自然法則を持つてゐる。この革命が來たときに、この革命の旗手、辯士、組織者、即ち新しい共和國的ロシヤ國家の先頭に置かれた人々は實は農民革命の道具に過ぎなかつた。彼等の眞の歴史的職能は革命の中心人物の願望と要求、即ちロシヤ農民一億二千萬の階級利益を代表することであつた。これ等は次の事項であつた——古式化した、半封建的な、國家的な秩序の破壞、大土地所有の支配の根絕、及び土地の分配と謂ふ形態に於ける農業改革である。この瞬間に於ける非常に重要な利益であると雖も、特殊的なものとして——戰爭の終結！それは實際農民が革命から求めたところの總てであり、彼が鬪爭に向つた理由であつた。斯くしてこれは全革命の歴史的內容となつた。

社會民主黨はマルクス主義的に訓練せられた工業プロレタリアトの代表として、この情

むだパンフレット『ロシヤ革命』(一九二二年ベルリンで發行)に於て讀み返すことは興味がある。例へば不名譽な媾和に署名した點を彼女は失敗と認めてゐる、又マルクス主義的原則に從つての農業改革を行はずに、農民の願望に從つて土地の單純な分配を實施した點を彼女は失敗と認めてゐる。更に彼女は、國民議會の解散が强行せられたが、同時に少くとも新議會に對する新選擧が開始せられなかつた點を重大な失敗と認めた。併しながらローザ・ルクセムブルグが議會主義的立場に於て如何に正しかつたとするも、人が單獨媾和を拋棄し、農民の願望に讓步を行はず、且國民議會を解散しなかつたと假定すれば、實際に於てボリセヴィキの權力獲得全體は全然見込がなかつたであらう。

斯くしてボリセヴイキ革命は來つた。革命は『プロレタリア的社會主義』の旗の下に行進したと雖も、それは農民革命の任務を解決する爲に來つた。

プロレタリア、卽ちロシヤの都市工業勞働者が一九一七年十一月の『プロレタリア的』變革の全體に於て正しく受動的役割を演じたことは特記せられねばならぬ。芝居の眞の役者は、總て農民の子弟たる兵卒及び水兵の一揆であつて、ほんの少數のみがプロレタリア

べられたるが如く、人は全然民主主義的媾和によつて、卽ち無併合無賠償無勝敗で戰爭を終らしめむと欲したのであつた、而してその後ブレスト＝リトフスク(一二)に於て實際振舞つたが如く振舞ふであらうことが當然豫見せらるるところの、勝利者ドイツ帝國主義(一三)の前に膝を屈するが如き不名譽な降伏によつて戰爭を終結せしめやうとは欲しなかつた。

この戰術が正當であつたか否かは此處では論じないであらう。併し農民によつて提出せられた要求が實行せられなかつたから、政治的に完全な訓練を經てゐなかつた農民子弟は忍耐を失つて、彼等の要求の總ての卽時的實現を豫約したところの政黨に向つて權力の移行を強制した。

四、一九一七年のボリセヴィキ革命

ローザ・ルクセムブルグはボリセヴィキ革命を大體に於て讃美し、且それを『社會主義の名譽恢復』であると感じたが、同時にボリセヴィキの權力獲得を最初に可能ならしめたところのものを何故に失敗として主張せむと試みたかを、彼女の異常に啓示に富み且教訓に富

的企圖が始まつた。農民は彼等の階級利益に相當する以上に、前進せしめらるべきであつた。この瞬間に於ける獨裁の性質は、『平等主義的』農民空想主義者の一部分と都市勞働者の一部分によつて支持せられ、勢力關係の凡ゆる實際的な表象を喪失し、歴史的には到達し能はざるものに權力の手段を以て敢て到達し得べしと信じたところの空想的知識階級の獨裁としてのみ記述すべきものである

五、『戰時共産主義』(一九一八年乃至一九二一年)

この時から、一九一八年乃至一九二一年の所謂『戰時共産主義』の有名な時期が始まつた。獨裁は强力の手段を以て完全な社會主義的秩序を實現すべく試みた。この秩序に在つては都市や村落の凡ゆる私資本主義的營業行爲(生産、商業)は禁止せられた、而して農民は國家の指令に從つて生産し、その生産物を國家に——實際は何等の補償なく——引渡すことを命ぜられた。この種の制度が、斯くの如き『社會主義』に耳を借し度くなかつた農民の頑强な反抗に遭遇せざるを得なかつたことは明白であつた。併しボリセヴィズムは

的又は他の系統のプロレタリア勞働者であつた。

都市プロレタリアトに於ては事情が異つてゐた。大戰中に始めて村落から又は小市民階級から工場に來つた『新』勞働者、殊に婦人勞働者はボリセヴィキ的な感情を懷いてゐた。併しながら『舊』勞働者、殊に多少勞働組合的な又は政治的な訓練を經て、未だプレハノーフ及び舊レーニン或はマルトフ及びアクセルロドの側の思想を懷いてゐた者は次のやうな疑問を起した、吾々は何の爲に數十年來ナロドニキの空想に對して鬪爭したのか、何の爲に吾々はロシヤに於て何等の社會主義的革命も可能でないと常に主張したのか? 吾々が數十年の長期に亙つて鬪爭したところのバクーニン主義に歸らなければならないのか? 勞働者大衆は自重し且受動的で、時の來るのを待つた。

今や革命は完成した。土地は分配せられ、媾和は締結せられ、農民の子弟は歸郷した。さてそれからどうなつたか? 農民はそれ以上の願望を實際に持つてゐなかつた、ところが勝利を得た革命的獨裁はそうでなかつた、獨裁は願望、計畫及び綱領を持つてゐた。それは甚だ廣汎な計畫及び綱領であつた。斯くして農民階級の『前進』を强制せむとする歷史

いだ。その後は農民は再び共産黨に走つた。等々。

一億の農民のこの動搖によつてのみ白系反動にとつて、再び一役演ずることが可能となつた。これはあの時代のロシャ農民の壓倒的多數に妥當した、併しこのことは自己に歸屬した土地を耕作する爲に何等の生産手段をも所有してゐなかつたところの貧農の若干の部分に村落に於けるボリセヴィキが支持を得てゐたことを除外しなかつた。この『農村貧民』は缺乏してゐる生産手段(馬、鋤等々)の取得に利益を感じた程には、共産主義的實驗に對しての農民的生産の保護に利益を感じなかつた。これ等の貧民はこれ等の生産手段を、ボリセヴィキ政府によつて設置せられ、且保護せられた『農村貧民の委員會』によつて最も簡に所有することが出來た、而してこの委員は富裕農民の收用と差押とによつて『村落に階單級鬪爭を持ち來つた』。併しながらこの方法で村落に於ける廣汎な社會的交代と同化が成就したときに於ては、この階級鬪爭の爲の地盤は消滅して行つた。

都市勞働者に就て謂へば、全工業の杜絶と都市住民に對して耐へ難き窮乏とを持ち來したところの政府の馬鹿々々しい政策によつて憤激せしめられ、且覺醒せしめられて彼等は

この反抗を彈壓し得ると見込を付けた。この瞬間に於ける獨裁の眞の意義は何であつたか？　それはロシヤ農民階級に對する空想的知識階級＝獨裁の戰爭であつた。この點に、根本に於て農民階級とボリセヴィキ的獨裁との間の戰爭に過ぎなかつたところの、内亂の奥深い原因が又存在してゐた。人は問ふであらう――そしてデニキン、コルチャク及びその他總ての白系將軍は？――と。同一なボリセヴィキ的政府に對し叛亂を起し、且この政府をほんの少し前に彼等自身の手によつて王座に据えたところの農民階級中に、白系將軍達が支持を見出さなかつたとしたならば、彼等はあの役割を決して演ずることが出來なかつたであらうし、彼等は無意義な挿話として止まつたであらう。農民階級が殊に徴發、凡ゆる商業殊に穀物取引の禁止、强制的自治體化、『播種委員會』等々の上に殊に置かれた地方に於ては、直ちに白系將軍の手下と外國權力の手下とが集つて來た、而して農民は戰爭から持ち歸つた武器を手にして彼等の側に移つて行つた。

　程なくそれに續いて振子の第二の振幅が當然來つた、勝利を得た反革命は一面に於ては復辟を企て、又他面に於ては放逐せられた地主を再びその權利に復歸せしめむが爲に、急

の後には、吾々總てが目撃者であるところの、一の新しい方向轉換が來つた。

六、『新經濟政策』（ネツプ）

今やネツプの時期に何が起つたか？　此處に革命にとつて非常に有益であり、且同時にボリセヴィキ政府にとつて非常に有利であつたところの多くの事件が起つた、即ちそれはロシヤの經濟的生産諸力の復興と農民の政治的安定とであつた。何故ならば、農民を一種の共産主義的協同經濟へ强制せむと試みたところの戰時共産主義の期間中は、農民は無駄な且白系の人々によつて濫用せられた暴動に從つて、經濟的怠業の手段に、彼等の生産の制限と謂ふ手段に訴へた。斯くしてロシヤ農業の總生産は一九二〇年乃至一九二一年の平均に於て大戰前の生産の五〇パーセントに減少した。農民は彼等自身に必要とする丈けしか生産しなかつた。彼等は輸出の爲には勿論のこと、都市の爲にも工業の爲にも何等の餘剩をも生産しなかつた。都市は斯くの如くして餓え疲らされ、都市住民は凍死するか、若くは逃亡しなければならなかつた（ペテルスブルグは住民の六二パーセントを、モスコー

一般に政府に對し反抗し始めた。一九一八年竝一九二〇年乃至一九二一年は共産主義的獨裁に對する勞働者の無數の罷業と示威運動とに滿された。レーニン自身も、彼がこの政策を拋棄して、所謂『新經濟政策』(ネップ)を實施した瞬間に於ける情勢を次の如く述べた、『デニキン及びコルチヤクの運命を確認し、及びボリセヴィキ獨裁に勝利を得せしめたところのものは、結局農民階級の動搖であつた』。ボリセヴィキは勝利を得た、何故ならば農民の全農業革命を爭つたであらうところの反革命の勝利と、彼等から甚大な犧牲を要求したが、而も彼等に農業革命の成果を保障したところの空想的革命との何れかに就ての選擇權しか農民は有してゐなかつたからである。併しボリセヴィキは實際に於て、それが農民によつて克服せられた瞬間に至つて始めて勝利を得た、即ち一九二一年三月レーニンはクロンシュタットの叛亂、及びペテルスブルグ勞働者の總罷業に壓迫せられて戰時共産主義の政策を拋棄し、且農民に彼が新しく取得した土地の上に小資本主義的に生産することを許容した。レーニンはその際、新經濟政策は『永久に且眞面目に』實施せらるるであらうと說明した。併し實際はそうは行かなかつた。一九二九年迄繼續したところのネップの時期

二一年乃至一九二二年の夏のロシャに於ては、公の發表に依れば、飢饉の結果五百萬以上の人命が失はれた。これはこの實驗の爲に支拂はれたところの代價であつた。

ネップは農民に對する共產主義的獨裁の降服を意味した。ボリセヴィズムは農民階級とその平和を締結した。ボリセヴィキの歷史的職能は、これ等の年に於ては農民經濟の有りの儘の、空想や錯覺のない要求であつた。ネップの時期に於けるボリセヴィキのこの冷靜と錯覺のない狀態は正しく外國に在る多數の觀察者に、ボリセヴィキ政府の進化に關する甚だ過度な錯覺を惹起せしめた。この氣分にとつて目立つてゐるものは、『ベルリネル・ターゲブラット』紙に發表せられたポール・シェフェルのモスコー通信であつた(ペー・シェフェル著ソヴィエト同盟の七箇年、一九三〇年刊)。其處には次の如く述べられてゐる、今やボリセヴィキは理性ある人物、總ての政府と同樣なる政府となつた、今や吾々はロシヤに於て、空想なく且實際政治的に設置せられた秩序ある農民國家を見付けるであらうと。それは一の錯誤であつた。何故ならば實際に於てはボリセヴィキの指導者等はこの發展に滿足せむと欲したものでは決してなかつた。

は四九パーセントを喪失した)、工場は休業し、工業は杜絶した。それは經濟的な死であり、經濟的な崩壞であつた。鐵道交通でさへ最早維持せらるることが出來なかつた(アー・ユーゴー著、ソヴィエト同盟の經濟的發展とその諸問題、一九三〇年刊參照)。

併しながら『新經濟政策』が實施せられ、農民に商品生産者として小資本主義的に經營するの權利が附與せられた瞬間以來、農民の生産は增加し始めた。斯くして又都市と都市的工業に生命が再び戻つて來た。一九一七年乃至一九二一年の間に絶えず降下して行つたロシヤの經濟的發展の曲線はネップの年に於て上昇した。様々な領域に於ける生産は一九二七年乃至一九二八年の平均に於て大戰前の水準に到達した。

併しながら戰時共産主義のこの實驗がロシヤ人民にとつて非常に高價な犧牲であつたことを忘れてはならない。非常な旱魃がロシヤの若干の地方を襲つた一九二一年に於ては、總ての貯藏品の完全な缺乏によつて、又農民的生産の上述の如き制限によつて、これ等の地方に於ては疫病を伴つた恐るべき饑饉が發生するの事態が起つた。以前にロシヤを襲つたところの饑饉時代と異つて、今度は國に何等の貯藏品も存在してゐなかつたから、一九

この發展はボリセヴィキの『老兵』によつて最大の關心を以て看視せられた。資本主義へのこの退却に對して最初に叛旗を飜したのはトロッキーであつた。一方に於てはブハーリンを先頭とする右翼派は農民に對し『諸君富めよ！』と叫んだ、何故ならばそれはソヴィエト國家に利益であるからであると。然るに他方に於てはトロッキーの指揮する左翼派は農民が富裕となり、而も――貧富の差別が生ずるならば、それは共產黨獨裁にとつて如何様な結果が生ずべきであらうか？　吾々はロシャに於て自動的に資本主義の再建をしたではないか！　吾々は最初に二千二百萬の農家を持つた、次に二千五百萬、終には二千八百萬の農家を持つに至つた。これに反して何等の獨裁も永久に發生しない。吾々は農民階級から利益を吸ひ上げられるか、然らずむば農民階級を粉碎する爲に手段を講じなければならない。ロシャに於ては資本主義的に經營する農民階級と共產黨獨裁とは同時に存在することは出來ない。前者か後者か何れか一であらざるを得ない！と。

獨裁の國家利益は實は以前の政策の維持を欲した。何故ならば農民が從つて納税者が益富裕となることは國家に利益であつたからである。それは工業に對し、輸出に對し及び

七、共産黨獨裁にとつての『ネップ』の危險

ネップは特に地方に於て死を宣告せられたところの資本主義の復活を招來した。農民が農業革命と戰時共産主義に從つて殆んど平均せしめられたならば、ネップの時期に於ては差別が始まつた。一九二七年に於ては官廳の報告によれば、大約次のやうな數字が現はれた。一億一千九百四十萬の農村住民の中、三千四百四十萬が農村プロレタリアトであつた、即ち此等の人々は謂ふまでもなく土地の國有化の結果、特定面積の小土地に對する請求權を得たが、何等の生産手段をも所有してゐなかつた。小農は三千四百四十萬、中農は五千二百萬、何不足なくやつて行つてゐる農民は一千一百萬、豪農又は『クラーキ』(一五)は五百萬であつた(殘餘の一千七百萬は農村に居住してゐるが、農業を生業としてゐない人々であつた)。

農民經營の以前の平均は消失した。資本主義的差別化が始まつた。同時に都市に於ては自由商業の再許可によつて新しいブルジョアジーが發生した。

八、スターリンの『一般方針』

斯くしてボルセヴィキ獨裁の最近の段階たる、スターリンの『一般方針』[二七]の政策が始まつた。それは農業に於ける所謂『集團農場化』と都市に於ける『工業化』との上に組立てられてゐる。これはそれ自體に於て社會主義者の側に在つても異論のない綱領的要求である。併しながら問題はその實現の程度及び方法である。ボリセヴィキ政府は農業に關して二つて目標を設定した、一、穀物の調達に際してソヴィエト獨裁を階級としての農民から獨立せしむべき經營の創設(國家經營卽ちソヴホーズ[二八]及び國家の指導の下に立つところの協同組合的經營卽ちコルホーズ[二八]の創設)、二、共產黨獨裁にとつて社會的及び政治的な點に於て最も危險なものとなり得るところの、農民階級のあの裕富な層の根絕とである。大農の根絕又は――ソヴィエトの用語に從へば――『クラーキ階級の解散』は『一般方針』の最も重要な構成要素となつた。純經濟的に言へば村落の最も給付能力ある要素を破壞することは愚劣であつた、併し共產主義の見地から言へば、最も危險なる敵を根絕することは徹頭徹

增大する經濟的發展に對し强固な基礎を與へた。併しながらそれは共產主義にとつては不利益であつた、殊に樣々な關係に於て不利益であつた。經濟的權力及び農民の自覺が益々增大するところの農民國家に於ては、元來大抵農民子弟から構成せらるるところの國家機關は農民の利益の放射によつて强く影響せらるるのである。農民子弟から構成せらるるところの赤軍も亦斯くの如き條件の下に於て益々農民利益の道具とならざるを得ないのである。斯くの如き方法に於てボリセヴィキ獨裁は次第にその血を吸ひ上げらるるか、若くは農民秩序によつて置き換へられざるを得ない、而してこの農民秩序は二つの異つた形態に於て考へられる、卽ち民主主義的農民共和國か、或は農民階級に基礎を置くところのボナパルト主義的陸軍國家かの何れか一である。

ロシヤ共產黨に於ける『左翼』及び『右翼』間の論爭は人的にはスターリンの勝利に歸した、併し物的にはトロッキーの勝利に歸した、トロッキーは個人としては追放せられたが、併しトロッキーの政策はスターリンによつて引受けられ、而も更に一層尖銳化された。

得る。それによれば最近二箇年間に於て二百萬に下らざる農民が拘禁せられ、且追放せられた。その中今日に至る迄『約半數』(卽ち一百萬)が强制宿泊所に居住してゐる。モロトフは强制勞働の爲に拘禁せられてゐるものの人數として百十三萬四千と謂ふ數字を發表した。

餘裕のある農民の大衆に對しては人頭稅が賦課せられた、この稅は一定の規定に羈束せらるるにあらずして、單に委員の自由裁量によつて各個人に賦課せられ得るのである。租稅を納付せざる場合に於ては、當該未納者に所屬する總ての物件が公賣に付せらるる。納稅した場合に於ては彼に對して更に納稅が最早出來ない迄に新な租稅が賦課せられるのである。集團農場化へ農民を踏入らしむる(これは農民の中流層とのみ關係してゐる、富農クラーキは、既に破滅してゐるにしても、『コルホース』に入ることが禁止せられてゐた)爲の有效な强制手段として、農業的信用金庫及び類似の組織を通じての凡ゆる農業的信用を受くる權利の剝奪、竝個々の農民へ機械を賣却することの禁止等の手段が使用せられ、從つて反抗者は最早必要なる生產手段を得ることが出來なかつた。何故ならば全國に於て信

尾追求價値を有してゐた。『クラーキ階級の根絶』と謂ふ標語が言葉の字義通りの意味に於て實施せられた事實を人は思ひ違ひしてはならない。二萬五千のボリセヴィキの委員は、この政策を執行する爲に無制限の代理權を附與せられて地方に特派せられた。スターリンは甚だ個人的にではあるが、これに就て極めて詳細な指令を『プラヴダ』紙（一九三〇年一月）に於て發表した。各村落毎に作成せられたる精確な黒表によつて、富農から彼等の生産手段――即ち機械、貯藏品、穀物、家屋、打穀場及び家畜――が取上げられ、彼等自身はその家族と共に冬の眞中に住宅から放逐せられた。反抗する者は銃殺せらるるか、若くは拘禁せらるるか、或は强制勞働の爲に北方へ家畜列車に乗せられて發送せられた。これは一九二九年――一九三〇年の冬にソヴィエト同盟の全領域に亙つて起つたのである。それは極度の亂暴と非人道を以て進行した。『クラーキ』に對するこの根絶運動が如何なる範圍を取つたかは、之れを『ニュウ・ヨーク・タイムス』のモスコー通信員ウォーター・デュランティ氏が二月三日の新聞紙で發表し、ロシヤ首相モロトフの第六回ソヴィエト大會（一九三一年三月）に於ける最後の演説によつて間接に確認せられたところの報告から推知し

有者によつて屠殺せられた、從つて家畜總頭數の減少はソヴィエト同盟の全領域に亙つて實に二、二、パーセント(!)に達した。

「絶望の淵に追ひ込まれた農民の一部は叛亂の組織を開始した。ソヴィエトの領域には數多の盜賊團が發生した。」赤軍は數多の內部的聯絡をロシヤ農民と結んでゐるから、赤軍にも不穩の狀態が發生した。斯くしてスターリンは一九三〇年三月に至り有名なる退却を宣言すべく餘儀なからしめられた。」その結果短期間に集團的農民經營の數は五四乃至二〇パーセントの減少を示した。集團的經營の數が一九三〇年三月に於て既に七〇パーセントに達してゐる二三の地方に於ては、それは退却後一〇パーセント又は七パーセントにさへ降下した。

農業に於ける『集團農場化』並國家的大經營の創設に關聯するところの、數多の經濟的、技術的、組織的及び財政的諸問題を此處で詳細に述ぶることは出來ないが、吾々は吾々の觀察にとつて最も重要なる一の問題をのみ述べて置き度いと思ふ。農業に創設せられた大經營(從つて亦コルホーズも)は、若しそれが經濟的に眞に繁榮すべきであるならば、以前

用を附與し、及び機械を供給し得る唯一のものは實にソヴィエト國であるからである。

九、『集團農場化』

經濟的な並直接政治的な抑壓の總ての此等の手段によつて、所謂『集團農場化』が遂に非常な廣範圍に亙つて實施せられた。結果は二三百萬の農民の所有權の沒收であつて、それは新に設置せられた『集團農場』に引渡された。中農の經濟は類似の方法で計畫的に破壞せられ、その復興は妨害せられた。一九三〇年三月この發展の絶頂に於て總農民的經營の五四パーセントを新に設けられた集團農場が包含したと謂ふならば、それは何と奇蹟ではなからうか！　ロシヤ農家の半數以上がほんの數箇月中に集團農場化され、新式の協同組合的な、共產主義的な生產に引渡された。

それは巨大な成功であつた。併しながら反撥は直接にそれに續いた。春に對する農業的準備は澁滯した。痛く『集團農場』に壓迫せられた農民は受動的反抗を爲し、引渡すべき機械特に――家畜を毀損した。巨大なる頭數の勞役家畜、搾乳家畜及び飼育家畜は以前の所

マルクに相當するのである！）斯くの如き資本はアメリカ若くは他の何れの國もロシャに對して長期債として供給し得るものではない。從つて集團農場化は（工業化に對し一層妥當する點であるが）、國内に於ける資本の蓄積の方法によつてのみ實施せられ得るに過ぎない（資本造成の他の源泉はインフレーション（二〇）であらう。之はソヴィエト政府によつて大量的に利用せられた。併し紙幣の印刷は何等眞の資本をも造成し得ず、且最も重大な危險を伴ふことは謂ふ迄もないことであらう）。併しながらロシャの如き斯くも貧困な國家に於て、人は如何にして斯くの如く巨大な資本を蓄積し得るであらうか？工業に關しては今迄斯くの如き方法で目標に到達した、即ち人は租税的公課により及び工業生産物の高價格政策により農民から必要な資本を强取したのであつた。ソヴィエト政府は實に生産獨占を爲し且物價を高價に定め得た、從つて農業は曾て共産主義者プレオブラセンスキイが述べたが如く、『社會主義的工業』の爲目茶苦茶な搾取を受ける『國内植民地』となつた。工業に投資せられた資本は之を人は農業から取つて來た。農民は勿論不滿であつたが、併しそれは暫く繼續した。ところが今や農業にも巨大な資本の投下を要求するところの企圖が

の原始的農民經營とは全然異つた、高度な技術的基礎の上に建てられねばならない。これに對しては單に國家經營のみならず、其處に發生した集團農場化も亦政府によつて――何故ならばロシヤに於ては他の資本供給の源泉は存在してゐない――機械、肥料及びその他の生產手段が十分に供給せられねばならぬ點が條件である。この點からしてソヴィエト政府に、農業に巨大な資本を投資すべき必要が生ずるのであるが、ソヴィエト政府は一九三〇年に於て單に約三十億ルーブリを調達したに過ぎなかつた。

都市又は農村に於ける大產業の發達の爲には從來二の公知せられてゐる方法の中一しかなかつた、卽ち舊工業國家に於て――例へばイギリス及びドイツに於て――資本主義的大產業が手工業から資本の徐々たる蓄積を通じ組織的に、進化的に造成せられたか、若くは――これはアメリカの卽ち植民型の發展であるが――大產業が輸入資本を基礎として發展したかの何れかであつた。ロシヤにとつては後進國なるが爲に進化的發展は可能でなかつた。それかと謂つてアメリカ的發展は巨大な資本の輸入を前提とするのであつた。（一九三一年に對する『計畫』は總額に於て約百七十億ルーブリを必要とし、それは約三百五十億

られた。彼女は次の如く指摘してゐる、强力な集團農場化はスターリンによつて定められた目標に到達することなくして、莫大な物質的價値の破壞、家畜頭數の破滅的減少及び農村や都市に於ける生活基準の低下に導いた。一群の大經營が造成せられたことは疑なきところであるが、併しそれ等は――若干の例外はあるが――拙劣に組織せられ、技術的には甚だ不完全に設備せられ、從つて不收益的なものである。而して實驗の實施にとつて物質的な前提が十分でないから、集團農場化は五箇年計畫の實現に裨益するところがなく、寧ろ反對に新しい打ち克ち難き困難の山岳を積み上げるであらうと。

集團農場化は同時に、それが農民のソヴィエト國家に對する反感を挑發することによつて、際限なき政治的危險を誘致するところの多量の『爆發物』を蒐集してゐるのである。

一〇、『工　業　化』

工業化は同樣に、吾々の意見に於てはこれも亦何等の異論も有り得ないところのものである。工業の發展は望むべきことか？　それは勿論自明のことである。唯だ如何なる方

試みらるゝならば、誰が一體資本を與ふるものであるかの疑問が迫つて來る。理論的には未だ尚ほ可能性が存在してゐるであらう――假令それは實際的に實施することが不可能であるにしても――この方法は、農業的生産者の大部分を私生産者として生産して行くことを放任し且繁榮せしめ、以てこの『私的部分』を工業の爲及び農業の『社會主義的部分』の爲に搾取することを得せしむることである。併しこの手續は實際に於て甚だ永くは繼續しないであらうし、且又餘り大なる效果を招來しないであらうと謂つても、それは理論的には可能であらう。次の數箇月の內に農業の私的部分を殆んど全部根絶せしめ、且總ての農業的經營の八〇パーセントを『集團農場』へ總括する爲に、人が一切を賭するならば、それは誤つた循環論法ではないかと問ふて見なければならない。アメリカの工場主やボルジッヒ商會によつて今やソヴィエト政府に信用貸せられたところの二億ルーブリは、實際の必要額に比較するに於ては取るに足らない額である。

　現在に至る迄の『集團農場化』の實際上の成果は、同志オルガ・ドマネフスカヤによつて最近刊行せられたその著『ソヴィエト・ロシヤに於ける農業社會主義』に於て適切に要約せ

等異常のものでないことを人は認むるであらう。反對に五箇年計畫がその極めて重要なる部分に於て叶はぬ願望に止まるであらうと謂ふ點は、最大の蓋然性が之を肯定するのである。併し總ての計畫が完全に又は大部分が完了する場合に於ても亦、ロシャはこの道程によつてまさか一の工業國になつたと謂ふが如き錯誤に陷つてはならない。ロシャに於ては今や概數全人口の八〇パーセントの農民がゐる。然るに殘りの二〇パーセントは都會に居住してゐる。この情勢をドイツ、イギリス又はアメリカ(これ等の國々に於ては全人口の六〇乃至七五パーセントが都會に居住し、工業を生業としてゐる)と比較するならば、ロシャが典型的な農業國家であることを人は承認せざるを得ない。

ロシャに於て企圖せられたる工業化が遂行せらるると吾々は認容し、而して毎年七十五萬の工業勞働者が――斯くの如き巨大な數は政府の計畫の中にさへ準備せられてゐないと雖も――新に從事せしめられ得ることを可能と前提することによつて、この認容を續けるとしよう(ソヴィエト同盟に於ける工業勞働者の總數は現今に於ては約三百五十萬であるのだ!)。然るときは次の五箇年間に總體約五百萬が新に農村から都市に移動するであらう。

法を以て、如何なる過程を辿つて、如何なる範圍に於て爲さるべきかが問題であるに過ぎない。これ等が問題の要點である。

若し諸君が絶對的數字を觀察するならば、次の點を確認するであらう、一九一三年に於て大約二千九百萬噸の石炭を產出したところのロシヤは『五箇年計畫』が完成せらるべき終期たる一九三三年十月一日迄に八千三百六十萬噸を產出するであらう、一九一三年に於て九百三十萬噸の產出があつた石腦油は一九三三年十月一日迄に二千五百六十萬噸、九百二十萬噸の鐵鑛は一千六百十萬噸、四百二十萬噸の銑鐵は八百萬噸、四百二十萬噸の鋼鐵は八百八十萬噸を產出するであらう。農業用の機械は一九一三年にその價格に於て六千七百萬ルーブリ生產せられたが、一九三三年十月一日迄には生產額は七億六千萬ルーブリとなるであらう。これはロシヤにとつては餘り大き過ぎる進步ではなからうか。併し一九一三年以來十八年の歲月が經過した。ロシヤ工業のこの期待せらるる發展と、それと等しい期間に於ける他の多くの國々の既に到達せられた工業化とを人が比較するならば、前揭の生產數量が事實上獲得せらるゝ點が未だ尙ほ何等確定せられないので、一層この成果が何

領域に亙つてゐる。斯くして五箇年計畫の完成後に於ても、世界の他の工業國の狀態を標準とすれば、ロシヤは後進農業國家たることを止めないであらう。(これは勿論、國內消費の廣汎な制限によつて資本蓄積を努力するところのソヴィエト政府が、工業商品の大量を世界市場に投賣することを除外するものではない)。人は正に斯くも容易に數百年の後進狀態を克服し得るものではない。

一一、農民及び勞働者の狀態

人がこの種の『數百年の飛躍』を爲さむと用意するならば、以前の共產主義仲間(ブハーリン、リーコフ等々)に於てでさへ最も力强き憂慮と疑惑が懸けらるところの、客觀的な歷史的可能性を人は考慮しなければならないのみならず、ボリセヴィキが斯くの如き考慮に對して如何に爭ふとしても、人民がそれに對して支拂ふであらうところの『代價』は必ず考慮せられねばならない。

吾々がそれを爲すに於ては、現在の發展斷面に於けるボリセヴィキ獨裁の實際的職能を

工業化に最も有望なこの狀態の下に於ては、五箇年の經過後は言ふまでもなく、最早人口の八〇パーセントはおろか、今や七八・五パーセントも農村に居住してゐないし、且生産に從事しないであらう。前代未聞の急激な發展の爲め、五箇年間に於ける都市に有利な人口の推移は單に人口の一・五パーセントに該當するに過ぎないであらう。

更に吾々は工業國家の他の特徴を考へて見よう。例へば生産せられた工業生産物の絕對的數量を考察せずに、寧ろ五箇年計畫が一九三三年十月一日迄に完全に遂行せらるるであらうと謂ふことを常に前提として、人口一人當りの商品の數量を考察するとしよう。然るときは人口一人當りの生産額は、石炭――ロシヤ五〇〇瓩、イギリス五〇〇〇瓩、フランス一三〇〇瓩、ベルギー三五〇〇瓩、アメリカ五〇〇〇瓩、鋼鐵及び鐵を總括して――ロシヤ一〇一瓩　イギリス三〇〇瓩、フランス四三〇瓩、ベルギー九六〇瓩、ドイツ四五〇瓩、アメリカ七三〇瓩、電力――ロシヤ八五キロワット、イギリス三二八キロワット、フランス三三六キロワット、ベルギー四六八キロワット、アメリカ合衆國八六〇キロワット（ロシヤ以外の國に就ては一九三〇年の現在によるである）。　斯くの如き狀態が工業の凡ゆる

らむが爲に革命を行つたところの農民は、革命中に獲得した土地から强制的に放逐せられ且飢餓的生存の宣告を受けた。併し飢餓的生存への宣告は『集團農場化せられた』農民にも妥當するのであつて、近き將來に於ける總ての約束に拘はらず、彼等には亦同樣に何等の人間の品位を保ち得るが如き生存も保障せらるることが出來なかつた（一日二封度のパンは多數のコルホーズに於て『大御馳走』と認められた）。

『勞働者及び農民』の國に於ける工業勞働者の狀態もこれと何等異なるところはない。吾々は此處でスターリンの『工業化』の客觀的困難と不可能とを詳細に述べないこととし度い、これ等は貧困な國に於ける資本の缺乏や、インフレーション及び貨幣價値下落の危險や、拙劣に樹てられた計畫の缺點及び誤謬や、多くの場合に於て直接に破滅的結果を惹き起すところの工業の樣々な領域に於ける不均衡や、鐵道及びその他の交通機關の殆んど克服し難き危機や、石炭及び燃料の周知の缺乏や、敎養ある技術家及び熟練した勞働者の缺乏や、ソヴィエト工業の腐蝕的癌腫たる、製品の不良な品質等から發生してゐるのである。

最もよく認識することが出來る。財産及び人命の如何に巨大な犠牲を農民階級が『集團農場化』の實施の爲に既に支拂はれねばならなかつたかは、吾々が述べ終つたところである。例へば政府の投資計畫の爲にロシヤ農民階級の總所得の三五乃至四〇パーセントに下らざる額が徵收せられねばならない。これは卽ち農民の消費及び個人的蓄積が剝奪せられねばならぬことである。これは農民が自己の生産を擴大し得る何等の可能性を持ち得ないであらうと謂ふことのみならず、「彼等は數年間飢餓の生活を營むべく强制せらるるであらうと謂ふことを意味するのである。而もロシヤ農民の平均所得（一人當り約八五ルーブリ）は、ヨーロッパに於ける最低のものに屬する點を吾々は忘れてはならない」。又ロシヤ農民は大戰前一人當一千三百四十封度の穀類季年生産に際して莫大な數量の穀類を外國に輸出してゐたが（飢餓輸出）、ドイツ、フランス又はスウェーデンは一人當り一層高い穀類季年生産に際して多量の小麥を輸入したことを吾々は忘れてならない。更にソヴィエト同盟に於ける小麥及びライ麥の一人當り收穫が未だ今日も尙ほ大戰前の狀態より遙かに劣つて一千八十封度に低下してゐる點を吾々は忘れてはならいのだ！　自己の土地の上に自由な主人た

七〇馬克に相當するが、實際的購買力から見れば約その半額に過ぎないのである。

尙ほ全住民從つて亦勞働者に對する衣服、靴その他總ての生活必需品の異常に拙惡な供給、次に不良な、一部分は忍び難き住宅狀態、資本主義的諸國及び帝政ロシヤに於けるよりもプロレタリア的ロシヤに於て二倍乃至三倍に上るところの經營災害事件の増加を追加して擧ぐるならば、吾々は『一般方針』の下に於ける勞働者生活狀態の明確な光景を得るのである。

この不都合がソヴィエト指導者の拙劣な意圖に歸せらるべきでなく、寧ろ資本の缺乏、不良な組織、及び擔ひ得べからざる投資を要求するところの『計畫』の根本誤謬の内に求めらるべきであることは、『ブルジョアジーなき國』に於ける『プロレタリアトの支配』への暗示と同じく、勞働者大衆の悲しむべき現實を變更するものでない。又この二三月以來全工業に於て（而も最近コルホーズに於てさへも）殆んど殘りなく出來高拂勞働の制度が開始せられ、賃銀の惡い仕事からの勞働者の逃走を防止せむが爲、ソヴィエト同盟が勞働者の移住權を廢止し、經營委員の權利が實際上廢除せられ、而して經營に於ては經營指導者の

様々な工業化綱領の如何なる部分が、及び如何なる範圍に於て實施せらるるかは、事實的賃銀の下落に拘はらず益々大なる能率を上ぐる事を强制せらるるところの勞働者階級に非常な犧牲を拂はしむることによつて生來するのである。勞働者に對する食糧制限分配は（ソヴィエト同盟に於ては凡ゆるものが制限して分配せられ、且切符によつてのみ支給が受けられる）、彼等が他の人民より優遇せられてゐると雖も、不十分であり且僅少である。勞働者はレニングラトの如き都市に於てでさへ實際に碾割、キャベツ、黑パン、少量の人造バタ及び鯡で生きて行かなければならなかつた。勞働力を維持するが爲にはこれ丈けでは十分でないから、勞働者は彼等の食糧要求の約三〇パーセントを、公の報告に從へば、所謂『自由市場』即ち密賣買に於て充さなければならない、その價格はヨーロッパに於て恐らく想像することが出來ない程高價である（モスコーに於て一封度の黑パン二乃至三馬克、一封度のバター又はヘット三〇馬克等々。一九三一年一月二十八日の『フォッシッセ・ツァイツング』紙參照）。この場合に於ける全ソヴィエト同盟の勞働者の平均賃銀は（部門及び數多の『種類』によつて段階があるが）、概數月に八〇ルーブリである。名義上は——約一

費によつて爲されたところの『社會主義的蓄積』は、マルクスによつて敍述せられた『原始的蓄積』に甚しく類似してゐる。國家は全人民の巨大な犧牲を拂はしめて爲すところの、工業の組織者である。ロシヤが大工業を得るが爲に、數世を通じ農民及び勞働者は哀れむべき生活を爲すべく命ぜられてゐる。ロシヤは『非常に飢える』ことを命ぜられてゐる。これが現在のロシヤ國の職能である。

同時に吾々は又、この獨裁の政治的性質及び社會的性質の法外な變化を認めるのである、この獨裁はプロレタリア的思想の代表者となつたにあらずして、國家的＝官僚的思想の代表者、卽ち換言すれば自己の目標が『階級を超越して』立つてゐると自ら信ずるところの國家官僚政治の代表者となつた。それは勤勞者階級の狀態の直接的改善の下に社會主義を實現するにあらずして、彼の目標を、數世間を通じての住民の最も重大な犧牲の上に遂行せむとする制度である。

第一期の作用に於て主觀的に、且一部分は支配階級に對する獨裁であり、且白軍の反革命の抑壓の爲の獨裁であつたところのこの獨裁は、今や勤勞住民の總ての階級が彼等に課

獨裁的專制權が設置せられ、遂には多數の工業部門に於て勞働時間に關する法律的規定が廢止せられた等の事實を、人が熟慮するに於ては殊に然りである。

一二、スターリン＝獨裁の實際的意義、勤勞者の負擔に於ての官僚的大工業の建設

さてボリセヴィキ國家の客觀的狀態は如何なるものであるか？　吾々はこれに對する歷史上の對比を有してゐる。この對比は總ての對比と同樣に逐字的に考へられてはならないのは當然である。吾々は重商主義(二二)の時代を、フランスに於けるコルベールの時代を、及び他の諸國に於ける『啓蒙的絕對主義(二三)』の時代を思ひ出すのである、この時代に於ては當時の工業の形態即ちマヌファクツール(二四)の開始が、異常なる國家手段の使用と農村住民の言ふべからざる苦痛の下に行はれた。吾々が今ロシヤに於て見るところのものは、この關係に於て重商主義と非常な類似點を有してゐる、併しそれが全然新なる基礎の上に立つてゐることは勿論である。而して零落せしめられた農民の負擔に於て、且プロレタリアトの勞働力の濫

『ナロドニキ』の最も强硬な反對者であつたが——彼の有名な著書『何を爲すべきか？』に於て類似の思想を述べた。この著書に於て、プロレタリアートに對してのみ興味を有してゐたところの彼は次の如く述べた『プロレタリアートの自發的運動は自力では社會主義的軌道の上に進行しない、この勞働者運動は斷えずブルジョア的＝イデオロギー的道に踏み迷ふのである（『唯の勞働組合主義』、トレード・ユニオン[26]主義等々）』。單に革命的社會民主黨卽ち革命的少數者がプロレタリアートを誤れる道から引き戻すことが出來る。プロレタリアートの救助者も亦革命的政黨の形態の內に於てのみ發生せざるを得ないと。現在のボリセヴイキ的制度はこの舊レーニン的思想の極めて明白な表現たることを示してゐる。プロレタリアートの上に立ち、プロレタリアートの意見に煩はさるることなく、且プロレタリアートに意見發表の自由を何等與へないところの上級權力であり——プロレタリアートにとつて何がよいことか、及び歷史的に何が必要であるかをプロレタリアート自身よりもよく知つてゐるところの革命的獨裁である。從つてこの獨裁は、恰も小兒を敎へて間違のない步みを爲さしむるが如く、プロレタリアートをして正當な道を步ましむる爲强力を以て强制すべく權利を

せられたる犧牲に對して逆ふことを得しめない爲に、且彼等がこの制度に反抗しないが爲に、これ等の勤勞階級を抑壓するところの一の獨裁となつた。その故に言葉の何等の自由も、言論の何等の自由も、意見發表の何等の自由も存在することが許されない。又その故にチエカ(二五)恐怖が無制限に暴れ狂ふことが許され、又その故に數十萬の人人が逮捕せられ且流刑に處せられ、數千人が死刑に處せらるることが許されてゐる。これ等は單にこの制度が批判せられ得ないが爲に、又は大衆がこの實驗を望むか望まないかの意見を發表し得ざらしむるが爲に、――而もこの實驗たるや、革命家の『精華』と自稱するところの、人民が何等相談を掛けないところの少數者によつて實施せらるるのである。

同時に吾々は舊バクーニン的イデオロギーの復活を見るのである。トカチョフは五十年前に次の如く書いてゐる、『人民は決して社會革命を作ることをしない。社會革命は常に單に革命的少數者によつて爲されてゐる。人民は自ら自己を救ふことが出來ない、人民は寧ろ外部的勢力によつて救はれなければならない、而してそれは革命的少數者であり、革命黨であるところの吾々である』と。――既に一九〇二年に於てレーニンは――當時は尙ほ

一三、獨裁はロシヤを社會主義に迄伴ひ行き得るか？

ボリセヴィキが集團農場化及び工業化の領域に於てその計畫を完成することに成功するや否や、及び如何なる範圍に成功するやの問題は甚しく論爭せられてゐる。吾々は此處では經濟的研究を詳細に述ぶることが出來ない。併しながら計畫の四七パーセント又は七四パーセントが完成せらるるか否かの問題は、斯くの如き政策を遂行する獨裁が社會主義的秩序を建設し得るか否かの問題として殘るのである。この秩序は二三百の工場を建て得るか、それは出來る。恐らく民主主義的秩序が爲すよりも高價に且不良に、併しそれを爲し得るのである。それは農業に於ても亦多數の大經營を設置し得るか、――農村住民の堪へ難き苦惱の下にそれは爲し得る。然らばそれは社會主義を實現し得るか？　それに對する回答は唯だ一しかあり得ない、卽ちそれは不可能だ！

後進國的ロシヤに於ける社會主義的秩序は如何なる政府も之を設立することは出來ない。併しながら經營を單に建設するのみならず、それを合理的に建設し、且社會主義的經

振ふのである。

手綱を以て指導せられねばならないところの未成年兒童としてのプロレタリアートと謂ふが如きこの表象は、自治的プロレタリアートの單なる前衞たることを欲したロシヤ社會民主黨の立脚點とは根本的に矛盾する。ボリセヴィズムに對しても社會民主主義的見解は必しも關係のないものではなかつた。例へば一九一七年ペテルスブルグの新聞『勞働者』に於てレーニンは次の如く書いた『小經營の大多數、技術家階級、及び人民大多數の習慣並意志を顧慮せずして、社會主義をロシヤに命令によつて開始せむとする者はないであらう。斯くの如きことを主張する者は嘘吐きである。貧民の大衆によつて卽ち住民の大多數によつて完全に是認せらるるであらうが如き手段、從つて技術上及び文化上完全に成熟し、且貧民の生活を直接に輕易にするであらうが如き手段をのみ吾々の制度に於ては眼目とするのである』と。

吾々がレーニンのこの言葉と『一般方針』の支配の下に於けるボリセヴィキ獨裁の行爲とを比較するならば、吾々は獨裁の既に發生した變化を最もよく認むるであらう。

勞働者階級の間にも、社會主義に對するかゝる――實際的煽動に匹敵するやうな形勢が造成せられてゐる。吾々が社會主義者迫害から、トロッキイ及びブハーリンの追放等々から認むるところの反抗的精神が培養せられてゐる。思索及び性格の獨立は嚴禁せられてゐる。自己の信念に對して勇氣を有する氣概ある人々は忍び得ざるところである。盲目的服從、スターリンの靴磨、凡ゆる批判の拋棄は、一般方針の下に於ける能率のよい特派委員や官吏の特徵である。裏面は野鄙、獵官運動、無軌道、殘忍である。而してロシヤ青年の英雄、最近の文學の主人公は如何なる人物であるか？　それは何等の『感傷』も、何等の良心の咎めも持合せのない無遠慮な人物、『アメリカ人』型の人物、猪武者、何事にも畏縮せず、且『ロマンチーク文藝』を野鄙に嘲笑するところの先天的な獨裁者的人物である。

斯くの如き性格を以て、卽ちスターリンの獨裁を自動的に培養したところのこの精神を以て、社會主義が建設せられ得るであらうか？

一四、社會主義と自由

濟組織の利益を人民の大衆に明白ならしむるが如く經營し得るところの政體のみが斯くの如き秩序に近付き得るであらう、住民の大多數の『生活を直接に輕易にし』且決定的な層及び階級の同情を社會主義の理念の爲に獲得し得る政府が、ローザ・ルクセムブルグの語を用ふれば、利己主義的な本能及び習慣の代りに社會的本能及び習慣を、受動及び怠惰の代りに大衆發意及び自動を創造するであらうところの政策が、この種の秩序に近付き得るであらう。

これを現在のボリセヴィキ獨裁は爲し得るか、爲すのであるか？　この獨裁は非常に多數の人々の間に、中農階級の間にさへ、社會主義が自分等の階級利益に直接に逆行する何ものかであると謂ふ觀念を發生せしめる、又この獨裁はこれ等の人々の間に社會主義と稱せらるる總てのものに對する劇烈な憎惡を惹き起さしめてゐる。何故ならばこれ等の人々の悲しむべき經驗によれば、社會主義は不良な工業製品、農民の搾取、强制集團農場化、人頭税、銃殺、公用徴收、『クラーキ階級の解散』等の爲の高い代價を意味してゐるからである。

活は死滅し、官僚主義のみが唯一の活動分子として殘るが如き假象生活となる。この法則は何者からも奪はれないものである』。・・・政治的自由が壓し潰さるるならば、『公的生活の蕪雜化が結果であらねばならぬ』・・・『恐怖政治が風紀を頽廢せしめる』・・・と。

公的生活の如何なる蕪雜化が、及び如何なる頽廢が既に現はれて來たかを示すが爲には、モスコーに於ける最近の産業黨事件に言及する丈けで十分である。社會主義的閲歷及び社會的閲歷を持つてゐる十四名の人々の性格を、敎養の高い而も知的に非常に地位の高い人人の性格を、彼等が公然と全世界の前で虛僞な悔悟を發表し、且明白な虛言を述べ立てる程に毀損することが可能であつたから、ボリセヴィキ獨裁の下に於ける政治的雰圍氣が既に如何に廣汎に汚され、且腐敗せしめられてゐるかを人は明瞭に見ることが出來るのである。

ゴルキイは最近フランスの雜誌『ヴュウ』の記者との會見に際して次の如く述べた、何故に資本主義的國家が信仰裁判を實施しなかつたかを、彼は實は理解することが出來ないと。併しロシヤに於ては既にそれが存在してゐるのだ！　失業、飢餓及び經濟的混亂の資

ローザ・ルクセムブルグは既に本書に引用せられた彼女の冊子『ロシャ革命』に於て、レーニン及びトロッキイに對し、彼等がロシャに於て民主主義を根絶したときに、彼等の行爲が彼女の意見によれば誤謬であつたと論難してゐるが、彼女は同一の冊子中に於て次の如く述べてゐる、凡ゆる民主主義的制度はその限界と缺點とを有してゐる、『吾々は決して形式的民主主義の偶像崇拜者ではなかつた。併し此處に唯だ一の藥であるところの社會主義的民主主義が存在してゐる。トロッキイ及びレーニンが見出したところの藥――凡ゆる自由の廢除――は、豫防せらるべき害惡より尙ほ一層惡いのである。それは生命ある泉をさへ、卽ち最も廣汎な大衆の活動的な生命、妨げられざる生命、精力的な生命を塞ぐのである』と。又彼女は他の箇所で次の如く謂つてゐる『勿論、獨裁である！……併しこの獨裁は階級の仕事でのみあり得る、而して階級の名を利用する少數の指導者の仕事ではあり得ない……』と。併し自由が壓し潰されるならば、全階級及び全國の政治的生活も亦それと共に壓し潰される。然るときはソヴィエトに於ける生活も亦益〻弛緩せざるを得ない。『普通選擧なくんば、妨げられない言論集會の自由なくんば、凡ゆる公共的制度の生

用語註解

(一)宗教改革。一五二七年ドイツのルーテルがローマ教會に對して多年の弊害の改革を要求したのに端を發したるキリスト教大革新運動のこと。

(二)宗教戰爭。宗教改革運動はその反動として直ちに反宗教改革の時代を現出した。西歐諸國に於ては新舊の宗教上の軋轢を口火として血腥さき鬪爭が展開した。これ等の鬪爭を宗教戰爭と稱し、ナントの勅令を以て終結してフランスに於ける所謂ユグノー戰爭（一五六二年乃至一五九八年間に於ける八個の戰爭）とウェストファレンの條約を以て終結したドイツに於ける三十年戰爭（一六一八年乃至一六四八年に亙る戰亂）とである。此等の戰亂の結果はヨーロッパに於けるフランスの覇權を確立した。

(三)再洗禮論者。宗教改革後に起つたキリスト教の一派で、幼兒の洗禮を無效とし本人の自發に基き再び洗禮を受くべきことを主張し、一般に心の中の信仰を重んじ、教會の儀式に反對した。

(四)イデオロギー。觀念形態の譯語がある。ある社會的階級が有する精神的なものの總稱。卽ち或る社會的階級に特有な物の見方、考へ方を謂ふ、例へばブルジョア・イデオロギー、プロレタリア・イデオロギーの如し。

(五)農奴。封建社會に於ける農民のこと、彼等は奴隷と異つて一定の土地で自由に農業に從事するが、併し居住移轉の自由を奪はれてゐた。

(六)メニセヴイキとボリセヴイキ。一九〇六年ストックホルムに開かれたロシヤ社會民主黨第三回大會に於て黨はレーニン派とプレハーノフ派とに分裂し、前者が多數を占めたのでボリセヴィキと稱せられ、後者は少數であつたからメニセヴィキと稱せられた。

(七)最大限綱領。一九〇五年ロシヤ第一革命に際して社會革命黨左翼によつて結成せられた一派を最大限主義者と稱し、それ等の綱領を最大限綱領と謂ふ。之に對し民主政治の確立を目標とせるものを最少限主義者と謂ふ。綱領とは政黨がその追求するところの根本目標、根本方針のこと。

(八)ナロドニキ。ロシヤの國民社會主義者の意。彼等は資

本主義的信仰裁判に對する藥は唯だ一つ存在し、それは共產主義的信仰裁判であると謂ふことが眞實であらうか？」 虛僞、腐敗及び隷屬とを伴ふ資本主義的野蠻が、正しく斯くの如き虛僞と、正しく斯くの如き腐敗、及び無良心とを伴ふところのプロレタリア的見地に立つた野蠻によつて克服せられ得ると謂ふことは眞實であるか？」 この點に於ては勝利を得たる社會主義は決して社會主義の最內部的本質と矛盾するが如き手段を以て、その發展中に社會主義が追求する總てのものを根絕するが如き手段を以ては建設せられ得ないと謂ふ意見に吾々は一致するのである。 恐怖及び腐敗の手段を以てしては恐らく重商主義制度が建設せられ得るであらう、プロレタリアートの問題は唯だ民主主義、自由及び最高の人道の土臺の上に於てのみ勝利を得ることが出來るのである！」

（終）

外國財閥又は資本家に一定の資源及び企業の租借を許し、(三)基本的大工業以外は一定の制限の下に個人に企業を許す等がその骨子である。

(一五)クラーキ。 ソヴィエト農村の富農、この語は元來吝嗇家とか高利貸とかの意義を有す。

(一六)ボナパルト主義。 ブルジョア的革命から生長しブルジョアジーの新なる統治形態たる絶對的君主政治を再建し、且ブルジョアジーの利益の爲にその手から支配權を奪取したところの革命的獨裁の事であつて、この獨裁は農民及び農民的軍隊の支持を受けた。例へば一七九五年乃至一八一五年のナポレオン一世、一八五二年乃至一八七一年のナポレオン三世の獨裁政治の如し。

(一七)スターリンの『一般方針』。 ソヴィエト同盟の現在の主權者スターリンは、五箇年計畫の一般方針に就き一九二九年十一月十九日の論文『偉大なる飛躍の年』に於て次の如く述べてゐる――『吾々は「舊ロシヤ」の一世紀も古い殘滓物を後に殘しつゝ、工業化によつて全速力で社會主義へ前進するであらう。吾々は金屬の國、自動車の國、トラクターの國となる、而して吾々がソヴイエト同盟を自動車の上に、農民をトラクターの上に乘せるときに、「文明」を自慢する尊敬すべき資本家は如何ばかり吾々に追付かむと努力することであらう。そのとき吾々は何れが進んだ國であり、何れが後れた國であるかを見るであらう』。

(一八)ソヴホーズとコルホーズ。 ソヴホーズはソヴィエト同盟に於ける大規模な國營農場、コルホーズは國家の特別の援助の下に貧農等をして共同してトラクター、肥料、最新技術等を使用せしめ、大規模な耕作をやる協同組合組織の農場、此等は五箇年計畫に於ける農村社會主義化の前提とせられあるもの。

(一九)『プラヴダ』紙。 現在全ソヴィエト同盟共產黨中央機關紙。

(二〇)インフレーション。 紙幣を以つて金融市場を氾濫せしめる事、それは當然に物價の騰貴を伴ふのである。

(二一)五箇年計畫。 ソヴィエト同盟に於て一九二八・二九年乃至一九三二・三年迄の五箇年間にその經濟力を三倍にし、且工業に於ける社會主義經濟の急速的發展によつて資本主義的殘存物を一掃し、農業に於ける社會主義的經濟によつて富農を掃滅し、以てプロレタリア國家の經濟的政治的基礎を强固にせむとする目的の爲

本主義の發展なしに社會主義が到來するであらうと信じ、社會主義の胚細胞を衰滅し崩壞しつゝある村落自治體（土地の共有を基礎とせるもの）の内に認めた。

（九）ミル。 ロシヤの農村共産體を謂ふ、農地を農民に口分し、之が用益の代償として一定の義務を當人に課し、その遂行に就てはミル全員が連帶責任を負ふ制度。

（一〇）アルテル。 ロシヤ獨特の自由協同體であつて、共通の勞働又は勞務に從事する者が組合を作つて仕事の遂行に便ならしむると共に、第三者に對して共同の責任を負ふ制度。

（一一）社會革命黨。 主として農民階級の特定の層に基礎を有してゐた、ロシヤに於ける小市民的政黨、帝政の沒落迄は極めて急進的で、十月革命後は反革命の側に立つて活躍した。

（一二）ブレスト＝リトフスク媾和條約。 ロシヤ・プロレタリア革命の成功と共にソヴィエト同盟は『休戰』を宣言し、一九一七年一一月露獨の代表がブレスト＝リトフスク（ポーランドの都市）に會し、休戰條約を締結し、續いて十二月媾和會議を開催し、ロシヤは『無併合無賠償平和』の原則を主張し、ドイツは侵略的要求を强調し武

力的外交的威嚇を以て屈辱を要求した。之に對しトロツキー以下のロシヤ委員は反對を唱へて引上げたるを以て、ドイツは直ちに攻撃を開始しペトログラードに進撃して來た。ソヴィエト政府はレーニンの指導によつてブレスト條件に同意の通知を發したが、ドイツは更にロシヤからポーランドその他の割讓を要求した。レーニンは更生の爲にはブレスト條約調印の止むなきを力說し大多數の贊成を得て、一九一八年二月十八日條約を締結し、次で第四回ソヴィエト大會に於て之を批准したが、條約は一九一八年十一月十三日のドイツ革命及びカイザアの廢位後ソヴィエト中央執行委員會の決議によつて廢棄せられた。

（一三）帝國主義。 帝國主義は廣狹樣々な意味を有するが、此處では排他的、侵略的方法による自國及び自國民の勢力の膨脹充實を主眼とする國家政策。

（一四）新經濟政策（ネツプ）。 一九二一年ソヴィエト同盟は反革命の掃蕩の後、從來の戰時共産主義を廢止して新に採用した經濟上の政策にして、（一）穀物徵發を廢し、見積收穫一割の現物税を賦課し、殘餘は自由に交換販賣を許し、（二）資源の開發、急速なる大工業化の爲に

本會の趣旨及事業

中央報德會は明治三十八年七月の創立に係り、爾來

地方の改良開發
自治の興振發展
道德經濟の調和
敎育產業の連絡
地方團體の援助

を綱領として斯道の爲めに微力を致しつゝあるが、其事業の主なるものは左の如くである。

定期刊行物

一、**斯民** 自治の振興、地方の開發に關する機關で、權威ある意見、豐富なる資料、新法令の解說等を每號滿載する（月一回一日發行、一冊參拾錢）。

講習及講演

一、**自治講習** 每年一回乃至二回中央又は地方に於て約一週間に亘る講習會を開催すること既に十九回に及んで居る。

一、**出張講演** の需めに應じ、且つ希望によりては

一、**講師紹介** 斡旋の勞を執る。

其の他隨時良書の刊行、講演會の開催等を行ふ。

入會案內

會員 どなたにても本會の趣意に贊成して御入會下さる方を歡迎す
入會申込書には住所氏名業務を記し、調印の上、會費を添へて送付せられたく、振替用紙の通信欄に記載されてもよろしい。

會費 通常會員として入會の方は會費年額參圓六拾錢（又は半ケ年分一圓八十錢）を納めて下さい。

會員には本會雜誌「斯民」及び「社會思想パンフレット」を無代配付致します。

送金には本會振替口座（**東京九七〇〇番**）を御利用下さい。

昭和七年五月十八日印刷
昭和七年五月二十三日發行

社會思想パンフレット 第七輯
（實費 郵稅共 五錢）

編輯兼發行人 近江匡男
東京市四谷區三光町八番地

印刷人 島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三秀舍
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所 **中央報德會**
東京市四谷區三光町八番地
電話四谷一八二一番
振替東京九七〇〇番

の計畫。

(二二)重商主義。 十六世紀乃至十八世紀に亘つて西歐諸國に於ける政治經濟論の基調となり、從つて當時の政治家經世家の思想を支配し、その萬策の指針となつた學説乃至思潮の概稱にして、特にフランスのコーベル以來隆盛となり、その主張は國民の富を現金の多寡に於て測定し、その增加の爲に國家的手段を用ふべきであるとするに在る。

(二三)啓蒙的絕對主義。 啓蒙時代卽ち十八世紀時代の絕對主義、絕對主義とは、憲法による制限を何等受けないところの君主の單獨政治を謂ふ。

(二四)マヌファクツール。 工場手工業の譯語あり。同業組合的手工業から資本主義的機械工業へ推移する迄の過渡期に於ける生產方法であつて、その生產技術は手工業であるが、個々の手工業者が獨立的に生產するにあらずして、多數の勞働者が賃銀勞働者として工場主に雇はれて生產するものを謂ふ。

(二五)チェカ。 全露非常委員會の略語。反革命運動、ソヴィエト政權の政策に對する怠業、投機その他の犯罪を取締る爲に、革命の混亂時代に組織されたるものであつて、一九二一年內亂の終熄、新經濟政策の施行と共にその權力が稍制限せられ、ゲペウと改稱せられた。

(二六)トレド・ユニオン。 勞働組合に對するイギリスの名稱。

(二七)ソヴィエト。 元來評議會の意、一九〇五年の革命當時ペテルスブルグに出來た『勞働者代議員ソヴィエト』がこの名稱の歷史的端緒である。ソヴィエト同盟の國家形態に於ける機關の名稱。

(二八)產業黨事件。 ソヴィエト同盟に起つたラムジン・チャルノフスキー等を指導者とする反革命結社事件として訴追せられたる刑事事件。內容は彼等の活動が英佛ポーランド等の政府と通謀し、ソヴィエト同盟に對する武力干涉の基礎をつくる爲に、ソヴィエトの消費產業を破壞し、恐慌と飢饉を誘發し、赤軍の破壞と動力、交通、軍事工業の怠業乃至攪亂を組織するに在つたと稱せられ、被告は何れも刑の宣告を受けた。

(二九)信仰裁判。 教會が異端說を奉ずる者を搜査審判すること。キリスト敎がローマ帝國國敎となつて以來、殊に中世時代に敎會の勢力盛んとなるや異說亦盛んに行はるにつれ、信仰裁判は屢々慘虐な刑罰を用ひた。